



宇和島におけるランバス先生の足跡

神田 健次

9月25・26日に、愛媛県の宇和島の宇和島中町教会を訪問する機会がありました。同窓の東島勇気牧師が牧会する宇和島中町教会は、来年で創立130周年を迎えますが、その記念事業の一環としての講演と礼拝の説教に招かれました。宇和島中町教会は、宇和島城を眺望する、街の中でも中心的な場所に建てられています【写真右下】、その教会の設立と宇和島城の城主とは深い歴史的な繋がりを秘めています。

学院を創設されたW. R. ランバス先生の父J. W. ランバス先生が、大阪から宇和島に帰省中の篠原資、西村静一郎両氏の招きによって、初めて宇和島を訪れたのは1887年5月であり、宿舎で聖書教授を行っています。もう一つの重要な繋がりは、同年の9月15日、W. R. ランバス先生が旧宇和島藩主の伊達家を訪問し、宗紀侯を診察した出来事でした。

この訪問について、『神戸又新日報』は、「當居留地四十七番館に住むドクトル、ランバス氏は先般宇和島地方へ赴き夫より海を渡りて廣嶋に到り ここにて豫て同地方へ出掛けたる氏の父に會し相携へて去る二十二日帰神せり 宇和島に到りし時は偶々伊達家より招かれその依頼によりて先頃より病に罹り危篤なる春山老公(旧宇和島藩主にて現戸主伊達宗徳君の実父)を診察したるよし 公は當年九十八歳にて近ごろまで頗る豊饒たり……」(『神戸又新日報』1887年9月25日)と、報じています。

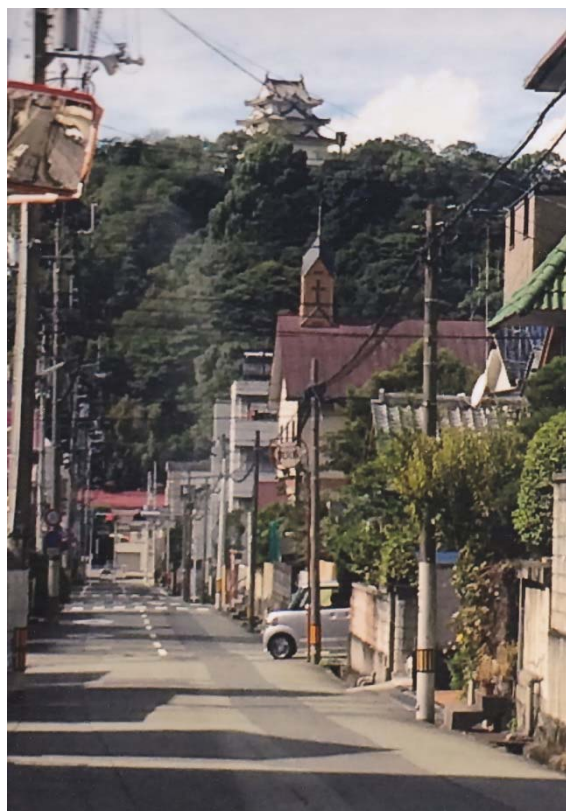


宇和島の七代藩主で隠居していた伊達宗紀侯(号:春山)【写真左下】が、途中で倒れ重病となり床に臥していた中、W. R. ランバス先生が医学を修めていた人であることを知り、

ランバス先生に往診を求めたとあります。そこで、ランバス先生は船で宇和島を訪れ、治療を行っていますが、神戸に帰られた後も、薬品や栄養食品等を送っています。その効果もあり、宗紀侯も回復して百歳の長寿を保って、1889年に逝去しています。

この時の宇和島訪問を、ランバス先生はその「日本雑記」(半田一吉訳) <『ウォルター・ラッセル・ランバス資料』、関西学院キリスト教教育史資料Ⅲ、関西学院キリスト教主義教育研究室、1980年に収録>の中で、「この老人はすぐれた学者だったので、漢文の聖書が贈呈された。宣教師招待の話とその訪問の理由を聞いたとき、この年老いた前大名は、その話を皆が聞きに行くことによって客を礼遇するように指示し、客の市内での滞在が敬意をもって迎えられ、市民が彼のメッセージを注意して聞くように指示したのだった。」と、記しています。また、その診察の時の様子を詳しく、以下のように述べています。

「美しい藤の花の格子垣で囲まれた一種の亭になっている応接室で、通常の茶の接待を受けた後、私達は一人ずつ非常に荘重に、丁重な儀礼をもって、この身分の高い患者の寝室に通された。老人は虎の皮の上に長々と横になって、そのまわりには親戚や家族や付き添い人など、大勢の人が取りまわっていた。これほど印象深い光景を見る特権を与えられたことは本当に希なことである。この尊敬すべき殿さまは卒中に倒れたのだが、その威厳があつて知性の高い顔、長くすりと伸びて胸の上に横たわる髭、大きな不



幸がもうすぐ起ころうとしていることを感じ、額を地につけて身をかがめて周囲に集まっている人達の完全な沈黙などが、この光景をユニークなものにしていた。体の半分は完全に麻痺していたけれども、それでも老公は石板に字を書いて意を通じることができた。自分の気持ちを表明し症状を簡単に述べるときの明確さは、強い意志の力が病める体をしっかりとつかんで、その力をまだゆるめていないことを示していた。単純な治療がほどこされ栄養物が与えられたが、これは彼にとって薬より必要なものだった。不思議なことに彼は左半分の機能を回復し、十二ヶ月以上生きながらえて、宣教師達の忠実な友人となったのだった。」



興味深い点は、宇和島でのこの診察が、少なくとも記録に残っている限りでは、ランバス先生の日本における医療行為としては唯一と言ってよいほど、大変珍しい記録です。今春、学院創立 125 周年の記念出版事業の一環として、ランバス先生の主著の一つでもある『医療宣教：二重の任務』（山内一郎、神田健次監修、堀忠訳、関西学院大学出版会、2016 年、原著は、1920 年）という著書も刊行され、ランバス先生の宣教活動の主要な働き

であることが、改めて明らかにされました。また実際に中国やアフリカ等では、医療宣教が精力的に担われています。しかしながら、ランバス先生が来日された頃には、日本では既に医療機関がある程度整備もされ、医療宣教の必要性がなかったという状況があったと思われます。

筆者の宇和島訪問は今回で三度目でしたが、東島牧師のご案内で、実際にランバス先生が、春山老公隠居後の別邸天教園を訪れ、写真にあるように、治療を施されたという茶室【写真左】を見させていただき、当時の治療光景を想像しながら、特別の感慨を覚えました。

なお、教会からさほど遠くない場所に、1896 年に W. P. ターナー宣教師【写真下右】が着任された頃に宣教師館が建設されています。現在は、普通の民家となっていますが、残された見事な煉瓦造り塀【写真下左】が、往時を偲ばせてくれます。

【神学部教授】



関西学院大学博物館平常展のご案内（西宮上ヶ原キャンパス時計台 2 階、開館日時はウェブページにてご確認ください）

Gift for the Future 関西学院のあゆみ 一学院の息吹・原田の森一 （2017 年 1 月 16 日～3 月 25 日）

Gift for the Future 関西学院のあゆみ 一上ヶ原に馳せた夢一 〈仮〉 （2017 年 4 月 1 日～5 月 27 日）